

学内広報

2019.9.24

no. 1526



北海道北見市常呂町の大島2遺跡における文学部考古学教室の発掘実習（8月30日）



志ある卓越。

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

病院分院の精神を受け継ぐ東大と産業と地域の協創拠点
目白台インターナショナル
ビレッジが誕生

病院分院の精神を受け継ぐ東大と地域と産業の協創拠点

目白台インターナショナル ビレッジが誕生

東京大学の新しい国際宿舎が誕生しました。国際宿舎というだけにとどまらず、産学協創拠点、地域連携拠点の機能を併せ持つ新時代の複合施設です。8月28日には完成記念式典と内覧会を開催し、110人を超える内外の関係者が参加しました。当日公開された施設の様子と、当地でかつて地域医療の場として愛された分院の歴史を振り返りながら、期待の新施設の船出を祝います。

インクルーシブ・グロース を実践する場

目白台インターナショナルビレッジは、地域で104年間も親しまれてきた分院の精神を現代風に更新しながら受け継いでいく複合施設です。多様な属性を持つ約1000人の学生・研究者が暮らす国際宿舎という特色を活かし、入居者と起業家や産業界の精鋭が国際的な協創を進めるインキュベーション支援施設が併設されています。従来の大学施設では類を見ない国際宿舎と産学協創拠点の融合が実現しました。分院が培ってきた地域との縁を活かし、地域からのイノベーションを牽引する場になる。ベンチャーから大企業まで多彩な企業との協創で新たな価値を生み、インクルーシブ・グロース (Inclusive Growth) の実践拠点になる。ビレッジにはそんな期待がこめられています。

一つのヒントになるのは、多くの人々が暮らす中で生じる様々な情報が新しいサービスにつながる可能性があるという発想。ビレッジは、データ駆動型社会に向けたイノベーションを地域とともに起こすためのフィールドとなり得ます。

またビレッジは、分院が長い間育ててきた地域とのつながりがもたらす価値を理解し、それを未来社会に向けて展開したものだともいえます。SAKURA SQUAREは24時間開放されています。

→アントレプレナービレッジに用意された会議室は3室。ガラス張りの壁に囲まれた室内からは西側の広場が一望でき、議論停滞時の気分転換になりそう。



→ワークスペースには様々なデザインの椅子やライトが。内覧会ではタマゴ型のやわらかい椅子に座って感触を確かめる人が続出していました。

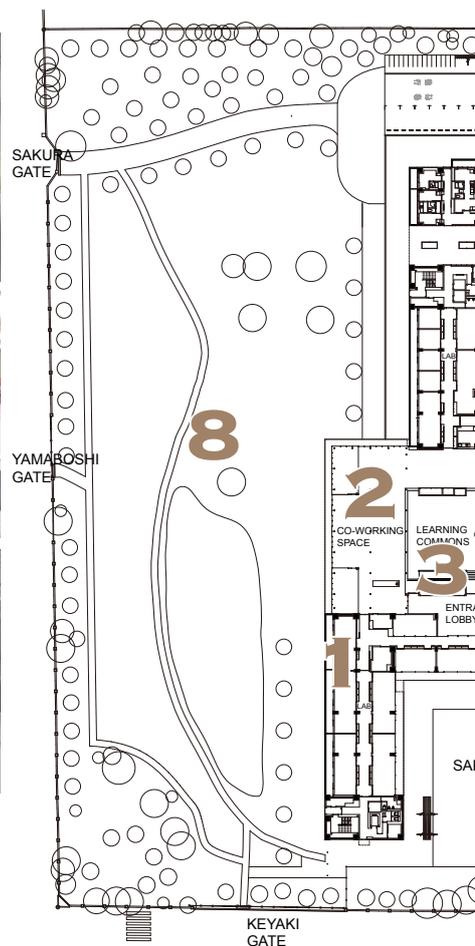


→ワークスペースの隣には一段低い大空間が。通常時はラーニング commons に、イベント時にはホールになります。記念式典はここで行われました。



将来のインクルーシブ・グロースの拡張スペースである西側広場は、分院時代の面影を色濃く残しています。敷地内のレストランは、分院の食堂がそうだったように、地域の皆さんも利用することができます。守衛所だった建物は分院の記憶をつなぐ展示スペースとなりました。

ビレッジは、知識集約型社会のなかで東大が何に貢献していくかを確かめる実践の場としての機能を備えています。最先端の知の創造の場で、様々な学生・研究者が日々生活します。855室の部屋と1000人もの「知のプロフェッショナル」とその卵たちは、新しい挑戦を始める企業や人にとって大きな価値となることでしょう。知識集約型社会における大学の未来地図を提示するには絶好の施設が、本郷から近い最高の地に誕生したのです。



↑ 1階 DINING HALLのイメージ。併設の大型キッチンで居住者が出身国の料理を振る舞って盛り上がりつつあるのにも最適な多目的スペースです。

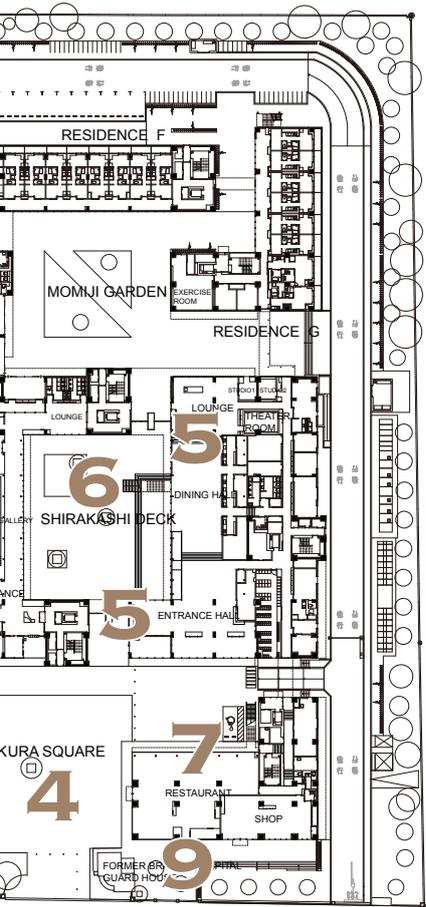
→分院名物だった桜に由来するSAKURA SQUAREは、24時間地域に開かれたスペース。昔のように、向かいにある幼稚園の子どもたちにとってもよい散歩スポットになるでしょう。





国際学生宿舎・ロッジの用途を再編

目白台インターナショナルビレッジの新設に伴い、東大の国際学生宿舎・ロッジの用途の見直しを行いました。白金台ロッジ（119室）は廃止とし、そのうち単身室58と夫婦室41は目白台へ移行。追分インターナショナルハウス（215室）は研究者用に用途を変更し、150室枠は豊島国際学生宿舎B棟へ、豊島B棟の150室枠は目白台へ移りました。6月時点で合計1964だった戸数は現在では2700に増えています。



→1階ラウンジには、水道付きのカウンター&スツールや備え付けの本棚が。各入居者が推薦図書置いて貸し借りする「目白台文庫」出現の日は近い？
→SAKURA SQUAREの隣には、日本の食文化をレストランとショップとカフェで発信するVILLAGE MARCHEとファミマが。ロボット職人が握る寿司に注目を！

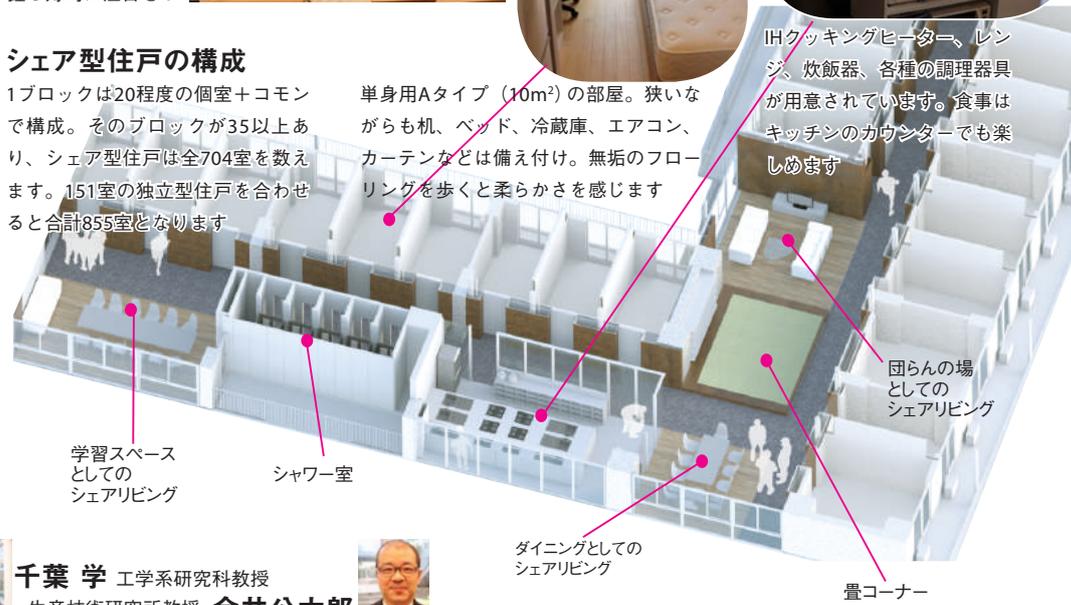


←施設中央に広がるのはSHIRAKASHI DECKの名を持つウッドデッキ。腐食しにくい材を使用しています。階段でつながる2階の東側にはソファセットが。

シェア型住戸の構成

1ブロックは20程度の個室+コモンで構成。そのブロックが35以上あり、シェア型住戸は全704室を数えます。151室の独立型住戸を合わせると合計855室となります

単身用Aタイプ（10m²）の部屋。狭いながらも机、ベッド、冷蔵庫、エアコン、カーテンなどは備え付け。無垢のフローリングを歩くとき柔らかさを感じます

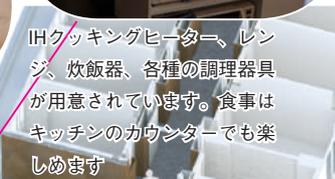


学習スペースとしてのシェアリビング

シャワー室

ダイニングとしてのシェアリビング

畳コーナー



IHクッキングヒーター、レンジ、炊飯器、各種の調理器具が用意されています。食事はキッチンのカウンターでも楽しめます

設計者に聞きました



千葉 学 工学系研究科教授
生産技術研究所教授 今井公太郎



日常生活の延長線上に新しい関係や新たな知が生まれる拠点にしたい、という思いは当初から持っていました。そこに総長のリーダーシップが加わり、産学協創の機能を併せ持つ場という構想に至りました。また、この地には附属病院分院が地域密着の活動を育んできた歴史があり、東大と地域の連携を深める場としての位置づけも欠かせません。大学のもう一つのキャンパスとして人々の交流から新しい知を創造していく場と捉えました。

重視したのはコモンスペースです。

学生同士、学生と地域、学生と企業。様々な交流の場を異なるスケールのコモンという形で実現しようと考えました。複数の棟の合間にコモンスペースを多数設え、人々が自由に交流できるようにしました。

施設を長く使うためにフレキシビリティも意識しました。エレベーター・階段、トイレ・ランドリーを擁するコア部分で全体を緩やかに分節し、ブロック構成としています。男女を階ごとに分ける、ゾーンごとに分けるなど、柔軟な対応が可能です。1ブロック20室とした個室部分は小

さめですが、部屋を出れば広々とした共用のリビングやキッチン、勉強スペースなどが自由に使えます。

産学協創施設は「目白台アントレプレナービレッジ」と名付けています。東大と企業との交流、スタートアップ支援の拠点です。国際宿舎に住む貴重な人材約1000人の潜在能力を活かすような開かれた場として設計しました。ラボゾーンには、15~45平米の高天井ラボスペースが15室。入居企業を選定し、必要に応じて使ってもらいます。コワーキングスペースは、打ち合わせや書類作成など、

ラボ入居者が自由に使える場所。ガラス張りの会議室も連続した空間内に配置し、互いに顔が見える形で協業ができます。キッチン、リクライニングスペース、喫茶スペースも用意しています。ラーニング commons のフロアは、最大140席を配置し、セミナー、ワークショップ、シンポジウムなど多様な使い方ができます。入口から続くフロア横はギャラリーとしても使えます。有機的な産学協創拠点として、イノベーションエコシステムを創出し、価値創造を推進する場となることを願います。

分院 104 年の歴史が息づく西側広場



ビレッジの西側は地域の皆さんにも開放されたエリアです。分院百周年の際に建立された記念碑はもちろん、「學」の刻印がある消火栓、駐車禁止の看板、レンガ積み基礎、水飲み場の跡、石段など、分院時代の遺物が意識的に随所

に残っているのが特徴。SAKURA GATE近くのヒマヤスギや、大きなユリノキにめりこんだガードレールも、昔の姿をとどめています。エリア内に敷設の散歩道に使われているウッドチップは、施設建設で伐採した樹木が素材。「上

を歩くだけで分院の歴史を踏みしめる気分がするニャー。でも、道から外れて数々の遺物を探し歩いたほうが、よりディープなタイムスリップ気分が堪能できるんだニャー」。KEYAKI GATE辺りに暮らす地域猫からの伝言です。

分院 104 年の歴史が覗ける旧守衛所



かつて守衛所だった建物が分院の歴史を伝える展示の場に。分院とオリンパスが世界で初めて完成させた胃カメラの初期型のほか、胃カメラ開発の物語を紹介する映像、分院の歴史を記す銘板、分院野球部一同が残したボールも眺められます。表札はありませんが、門柱と分院の精神はなお健在です。

附属病院分院、最後の分院長に聞きました

私が分院に来たのは1988年です。それまでは筑波大学にいましたが、分院長・内科長だった尾形悦郎先生からお声がけいただき、第四内科に入局しました。いわゆる「ナンバー内科」の時代です。

すでに当時、統合は既定路線でした。各地の医学部附属病院分院の見直しが国主導で行われたのです。でも、分院に愛着を持つ人は数多く、残す方法はないのか、と各科から声が上がりました。私自身もちろん残したかった。助教授となり、分院百周年記念事業の実行委員長を務めた私は、外科の教授だった大原毅先生とともに、存続の道を模索したんです。

トータルケアは分院の伝統の一つ

その一つが、本院は先端医療を行い、分院はトータルケアを行うという役割の再定義でした。部位ごとに別科で治療するのが普通ですが、そうせず患者さんと総合的治療を行うというアプローチです。貧しい人を公費で治す治療院（永楽病院）を源とする分院らしいやり方が実は現代に求められていると考えました。

もう一つ説得材料と考えたのは、分院生まれの胃カメラです。宇治達郎先生がオリンパスの技師とともに努力を重ね、世界に先駆けて開発した胃内撮影機は、ファイバースコープ、内視鏡へとつながり、医療は飛躍的に発展しました。そんなノーベル賞級の研究が行われた現場を失うのは社会の損失だ、と訴えたのです。

残念ながら国の方針を変えることは叶いませんでした。統合は正式には2001年4月ですが、実際はその1年ほど前に、分院のスタッフも患者さんも本院に移転。私は腎臓・内分泌内科教授として治療と研究・教育を行いました。東大を皮切りに、全国の大学附属病院がナンバー内科から臓器別の科編成に変わりました。

ただ、この運動によって分院内の結びつきはより強まったと思います。本院の半分程度の規模で、全員が顔見知り。「家族的な病院」とよく言われたものです。年末には「目白台親睦会」という宴を開き、

科長陣が練習を積んで芸を披露①するのが常でした。春は正門近くの桜②の前で記念撮影。夏は中庭でビアパーティー。12月には向かいの幼稚園の皆様を招いてカードを贈り、お礼に園児たちがクリスマスキャロルを歌ってくれました。地元の警察署や消防署との交流も盛んで地域に密着した病院でした。

だからこそ、地域の皆さんへの説明会に臨むのは心苦しかった。糾弾されるかも、と思いました。でも、分院が好きで、存続の道を探って運動したことを打ち明けると、「あなたがそう言うなら仕方ない」と言っていました。

科長会の選挙で最後の分院長に選ばれた際には、分院を残そうという気持ちはもうなく、21世紀の東大病院を作るんだという思いでした。一方で、分院の仲間たちは新しい環境に順応してしっかりとその実力を発揮してくれるだろうか、という心配もありました。この4月に瀬戸泰之先生が病院長になると聞いたときはうれしかったですね。実は彼も分院時代の仲間の一人なんです。

地域密着と多様性の精神を継ぐ場

その後、跡地の行方が気になりつつ、目白台に来ることはありませんでした。1年半ほど前にたまたまクルマで前を通った際は、工事中でまだ門がありました。東大が跡地を手放さず、今回、留学生などが居住する施設ができたのは非常にうれしいことです。大学にとって留学生の存在は重要だと思います。アメリカにいた頃、いろいろな国から来た留学生から多様な意見を聞くことの重要性を実感しました。余談ですが、30数年前、東大出身でない私に尾形先生が声をかけてくれたのは、分院をヘテロな組織にしたいという思いがあったからだったそうです。

いま、私は先端研で研究を続ける一方で、信州大学にも通っています。地域医療の活性化という大仕事を引き受けた際には、分院時代の経験とそこで培った精神が関係しているように感じています。



藤田敏郎

先端科学技術研究センター フェロー
信州大学特別特任教授



当時は「腹中カメラ」と呼んでいた胃カメラの成果を外科医長に報告する開発陣の様子。左から宇治副手、林田医長、杉浦技師、深海技師、今井研究員。

※昔の分院関係の写真は全て『東京大学医学部附属病院分院のあゆみ』（分院閉院記念事業実行委員会／平成13年3月発行）より

『光る壁画』（吉村昭／新潮文庫）。胃カメラ誕生までのドラマを描いた名作です。「分院百周年の際は、吉村さんが記念講演をしてくださいました」と藤田先生。



教養教育の現場から

第35回

リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、大学のすべての構成員がぜひ知っておくべき教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

リベラル・アーツ教育の学内連携を推進

／KOMEX新機構長に聞く

—2度目の機構長就任ですね。

「前に機構長を2期4年務め、この2年は財務委員長として機構に携わりましたが、今回機構長として再登板となりました」

—では第3期松尾時代の指針などを。

「機構の運営方針は研究科長が議長を務める戦略会議で定めますが、リベラル・アーツ教育を行っている他部局との連携を強化することを指針の1つにしたいと思います。2015年に機構内の重複感を調整するために8つあった部門を7つに再編しましたが、今度は全学に目を向け、リベラル・アーツ教育に関する学内部局間連携を高めようというわけです」

新しい連携研究機構にも参画

「10月1日に発足するEdTech連携研究機構には総合文化研究科も加わります。参加教員は関一夫先生、坂口菊恵先生、椿本弥生先生、私。つまり機構に所属する3人が参加します。連携研究機構への参加は、リベラル・アーツ教育の学内連携の第一歩となります。EducationとTechnologyを掛け合わせるEdTechは、教育学に縁が深く、教養教育の高度化を担う機構と重なる部分も大きいのです」

—教育学だとアクティブラーニング部門の吉田壘先生が専門家でしたね。

「実は吉田先生は大学総合教育研究センターに移りました。機構とは活動の分野が近く、もともと交流が盛んです。学問の入口にいる1・2年生が学問領域の全体像をつかむための学術俯瞰講義を、これまでも両方で協力して実施してきましたが、吉田先生の縁も活かしてより連携を深めるつもりです。たとえば、蓄積した講義映像をもっと活用するなど、知恵を出し合っていきたいですね」

「もう一つ進めたいのは機構内連携です。」

「もう一つ進めたいのは機構内連携です。各々の取り組みは総じて評価が高いのに、機構としての活動と認知されたいのはもったいないと常々感じていました。そこで目をつけたのがSDGsです。実は一部局でSDGs全体をカバーできるのは総合文化研究科だけ。機構でも複数部門でSDGsに関わる活動を行ってきました」

SDGs教育のプラットフォームに

「3年半の時限プロジェクトとして、9月1日に「SDGs教育推進プラットフォーム」を立ち上げました。環境エネルギーについて長く研究してきた瀬川浩司先



機構長

松尾基之

生（環境エネルギー科学特別部門）、国連と連携した取り組みを行ってきた井筒節先生（国際連携部門）、国際研修を通して学生に軍縮を考えさせてきた岡田晃枝先生（初年次教育部門）……。7部門が個々に進めてきたSDGs関連の取組みに横串を通して可視化します。プラットフォームに特任の教員を配置し、関連する授業などの取組みを発信していきます。11月15日には、瀬川先生が中心となって教養学部70周年記念事業の一環でSDGs関連のシンポジウムを行います」

「専任と特任で25人、兼任を入れると50人を数える機構の所属教員がアクティブに活動できるようにするのが機構長の役目だと思っています。能力を発揮できる環境を整え、東大全体の教養教育のレベルアップにつなげたいですね」

—前身の教養教育開発機構から数えると14年。手応えはいかがですか。

「昔の学生は少し引込み思案なところがありましたが、近頃はアクティブラーニング一つとっても慣れていると思います。機構だけの影響とはもちろん言えませんが、学生が概してオープンになってきているように感じています」

教養教育高度化機構奨励賞

2014年度	岡田晃枝、山邊昭則
2015年度	岡田晃枝、坂口菊恵、白佐立
2016年度	岡田晃枝、坂口菊恵、中村優希
2017年度	坂口菊恵、井筒節、江間有沙、吉田壘
2018年度	椿本弥生、吉田壘
2019年度	岡本佳子、中村優希、堀まゆみ

「機構では、各教員が前年度の実績を書いて提出した自己申告シートを執行委員会が採点し、表彰しています。賞金はありませんが、CVに書ける正式なものです」



定松 淳 (社会学)



高橋史子 (社会学)



中村長史 (政治学)



原 裕太 (地理学)

今年度新任教員の顔ぶれ

- ① 科学技術インタープリター養成部門 特任准教授「2012年度から2017年度まで現在と同じ部門に所属していました。また駒場で頑張ります！」
- ② 社会連携部門 特任講師「およそ20年前の入学当時と同様、少し緊張しつつも、楽しみにしています」
- ③ アクティブラーニング部門 特任助教「『模擬国連会議』というアクティブラーニングの手法を用いた授業を実施していきます」
- ④ SDGs教育推進プラットフォーム 特任助教「職責を果たし、よりよい社会に向けた一助となれるよう、精一杯頑張ります」

総長室だより 第24回

～ 思いを伝える生声コラム～

東京大学第30代総長

五神 真



歓喜の北米出張

8月、北米に出張しました。第一の目的は、全学協定を結んでいるブリティッシュ・コロンビア大学(UBC)への訪問でした。昨年、国際総合力認定(Go Global Gateway)事業の一環として両大学の学生交流を行いました。横浜スタジアムでの両大学の野球部員による交流試合がメインイベントでした。今回は、慶應義塾大、カリフォルニア州立大サクラメント校を加え、4大学の国際リーグ戦を行うことになりました。東大は3位決定戦でUBCを3-2で下して3位になりました。安打数は東大4本に対してUBCが9本。失策数も東大のほうが多かったのですが、小林大雅投手が無四球で投げ抜き、勝つことが出来ました。小学校時代に従兄弟に連れられて東大野球部が大敗するのを神宮球場で見て以来、勝ち試合には縁がなかったのですが、バンクーバーの地で味わう勝利の歓喜は格別でした。

その前日に、UBCキャンパス内の学長公邸で夕食会がありました。学長公邸はかつてAPEC首脳会議の晩餐会場にもなったところで、クリントン、エリツィン両大統領が首脳会談で座った椅子に座ってサンタ・オノ学長と記念写真を撮りました。晩餐会では、オノ学長からThe President's Medal of Excellenceが授与されました。UBCの目的や理想に顕著に貢献した者のみに与えられるものとのことです。総長就任以前から、長年東大とUBCとの研究交流などを進めてきたことを評価して頂きました。思いもかけない榮譽に、改めてオノ学長に感謝した次第です。また、キャンパスにはNitobe Memorial Gardenという日本庭園があり、日本人庭師が丹念に手入れをしていました。「太平洋の架け橋」となり、カナダで客死した新渡戸稲造博士を記念した素晴らしい庭園でした。まさに架け橋としてUBCとの交流をいっそう深めたいと感じた数日間でした。

その後に訪れた米国では、「東京大学グローバル・インターンシップ・プログラム」を通して、ダイキン工業のベンチャー支援施設でインターンシップ中の東大生たちに会いました。さらに、ヒューストンに所在する同社の巨大な工場に立ち寄りました。建物面積は本郷キャンパスの敷地面積とほぼ同じ37万平米。全米第3位の面積を誇る広大な規模に圧倒されました。

また、スタンフォード大学アジア米国技術経営研究センター所長のリチャード・ダッシャー教授との会談では、「東大の改革はdestructive innovation(破壊的イノベーション)だ」と言われました。社会の変革を駆動するという本学の改革は、アメリカの大学から見ても非常に先進的に見えるようです。アメリカで改めて背中を押してもらった気持ちになりました。

シリーズ 第21回 連携研究機構

芸術創造
連携研究機構

の巻



話／機構長
河合祥一郎 先生

アートで知性を拡張し未来をひらく

— Art Center, The University of Tokyoの頭文字
をつなげた東大カラーのロゴ。

ACUT

これは何と読めばいいですか？

「アキュート」です。AcuteやActの意味のほか、あえて崩した文字の並びに「既成概念に囚われず前例のないことに挑戦しよう」との意味もこめました。現美新幹線を手がけた鈴木直之さんによるデザインです。「発端は教育学研究科の岡田猛先生でした。認知科学の観点で芸術創造とは何かを研究してきた岡田先生から、芸術創造を軸に新しい大学教育を始めようとの提案があったんです。実は駒場では芸術家を招いて行う授業を1980年代から続けてきました。メディアアートの山口勝弘さん、狂言の野村萬斎さん、映画監督のデビッド・ブレアさんと青山真治さん……。そうした経緯を踏まえて、現代美術史の加治屋健司先生が窓口となり、2017年から準備を重ねてきました。そして、総合文化、教育学、工学系、数理科学、医学系、情報学環、人文社会系の7部局が参加してこの5月に発足。岡田先生と加治屋先生が副機構長を務めています」

— 芸術の研究は従来も各部局にありましたよね。

「ただ、所属が違う教員間の交流はあまりありませんでした。私たちは、学内の情報を共有し、学内外の研究者や芸術家との共同研究のプラットフォームとなります。一方で重点活動と捉えるのが、芸術実技の授業です。近年では美術家のO JUNさん、写真家の長島有里枝さん、デザイナーの野老朝雄さんなど一線の芸術家による授業を実施しており、今年度も計18コマを開講します。将来は、学生が作品創作に必要な機材を使えるアトラボや、学内の芸術資源を集積して活用するクリエイティブアーカイブ、芸術家が滞在して創作するアーティストインレジデンスも行いたいですね」

— 東大がなぜ芸術に力を入れるのでしょうか。

「日本ではまだ少ないですが、海外の総合大学の多くは芸術を活用しています。たとえば中国の主要総合大学の約8割に芸術系の学部があり、アメリカではリベラルアーツの一環で芸術実技を行う大学も多い。芸術は知的なコミュニティに不可欠な要素なんです。芸術には決まった答がありません。芸術と取り組むなかで、現代社会が直面する答のない問題にアプローチするやり方を学べるはず。また、意外なものや突飛なものにあえて着目する芸術と触れることは、多様な価値観を学ぶ契機にもなる。学術でもビジネスでも何かをゼロから創り出す際にこそ芸術が力になると思います」

www.art.c.u-tokyo.ac.jp

東大アラムナイ通信

卒業生と大学をつなげるプラットフォーム

第3回

社会連携本部副本部長
副学長、大気海洋研究所教授

津田 敦



卒業生が持つ潜在的なチカラ

東京大学は、土地建物、研究成果、貴重な資料など、多くの資産を有する大学ですが、最も価値のある資産は卒業生です。卒業生とそのネットワークは大学にとって貴重な財産であるとともに卒業生にとっても価値ある資産です。しかし、卒業生も大学も、この資産をうまく活用してきたとは言えません。これまで東京大学は多くの人材を世に送り出してきましたが、1877年の開学以来、学部学科別及び部活動の同窓会などはあるものの、全学同窓会は存在しませんでした。1973年、卒業生による全学同窓会結成の活動が始まり、学部学科を超え、居住地・勤務地をベースにした地域同窓会が順次結成されていき、2014年には全都道府県に地域同窓会が出揃いました。

これまでにいくつかの地域同窓会にお邪魔させていただきましたが、その規模や活動は地域によって様々です。規模の大きい東京銀杏会は、東京大学の様々な活動にご支援いただくとともに、現役世代の情報交換、生涯教育の場を提供しています。鎌倉淡青会は、会員の平均年齢が80歳を超える組織ですが、最もアクティブな同窓会組織の一つであり、公開セミナーや「街道を歩く会」など20以上の活動を展開しています。余談にはなりますが、70名を超える鎌倉淡青会会員の前で挨拶させていただいた時は、初めて学会発表をした時よりも緊張しました。また、新潟銀杏会、山形赤門会は30人程度の規模の集まりではありますが、幅広い世代、業種の卒業生が集まり、活発な情報交換が行われ、地域の将来が語られているのが印象的でした。

来月10月19日のホームカミングデイには、多くの卒業生がキャンパスを訪れます。一人でも多くの卒業生と話し、現在の東京大学に対する率直な意見が聞きたいと思っています。

大学として、また同窓会組織として卒業生ネットワークに関してやるべきことは山積みですが、国内を網羅する地域同窓会組織は、教育・研究における大学と地域との連携の橋渡しや、地域の優秀な高校生の入学誘致などには大きな潜在力を持っていると考えています。



ホームカミング
グデイで毎年
人気を集める
東大蔵元会の
ブース

東大アラムナイ www.u-tokyo.ac.jp/ja/alumni/

デジタル万華鏡

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

法学部研究室図書室

三谷芽生子

第5回

明治新聞雑誌文庫

雨宮純子

中世裁判資料と獄中随筆!

東京大学法学部には、法学・政治学の専門図書館としての法学部研究室図書室の他に、法学部研究室図書室法制史資料室、大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター（明治新聞雑誌文庫・原資料部）があります。今回は、法制史資料室と明治新聞雑誌文庫（以下「明治文庫」）からデジタル化した資料をご紹介します。

法制史資料室は、歴代の法制史講座担当教授が収集した古代から近代にわたる法制史に関する資料数千点を所蔵しています。古典籍の他、十手等の捕物用具や高札等も所蔵しており、これら所蔵資料の中から、「御前落居記録」「御前落居奉書」等をデジタル化しました。

この2点は、中期室町幕府の裁判を研究する上での最重要の史料と言われており、室町幕府第6代将軍足利義教時代の裁判の実態に触れることができます。「記録」には72件、「奉書」



ビューア「Mirador」で翻刻テキストを表示（「御前落居記録」）

には118件の裁判記録があり、足利義教の花押も見ることができます。翻刻テキストも合わせて公開しましたので、古文書解読のセルフラーニングにもご活用ください。

明治文庫からは、「宮武外骨蒐集資料」（当文庫初代主任宮武外骨が蒐集、執筆した資料群）をご紹介します。外骨は、生涯で筆禍による入獄4回、罰金・発禁を繰り返しながらも「過激にして愛嬌あり」の精神で出版活動を行った反骨のジャーナリストです。

大正12年、関東大震災により明治期の出版印刷物が多数焼失しました。吉野作造や外骨たちは明治研究に不可欠な資料として新聞・雑誌などの蒐集に尽力、様々な支援のもとに昭和2年法学部へ明治文庫が設置されました。



「宮武外骨蒐集資料」から「獄中随筆」

外骨の資料蒐集への熱意が感じられる蒐集旅行の日記（「東北旅行日記」）や、入獄中に書かれた随筆など、「筆記せざれば全く忘却しること多し」と書き残した外骨の博覧強記と、ユニークな発想メモの数々にぜひ触れてみてください。

学術資産アーカイブ化推進室

digital-archive@lib.u-tokyo.ac.jp

インタープリターズ・第146回 バイブル

総合文化研究科准教授 豊田太郎
科学技術インタープリター養成部門

ScienceとFictionの協奏

講義でも学会・研究会でも、スクリーンに映し出された図や記号を指しながら「このヒトがこう動いて……」と話される教授や講師をよく見かける。顧みると私もそうだ。学生に「この分子の気持ちを考えて……」と話すことさえある。これは擬人法と呼ばれる修辞法である。私の知る限り、国際学会でも言語を問わず、講演中に擬人法を交えて話す情熱に溢れた講演者があり、その内容に引き込まれることがしばしばある。講演抄録にはそのような表現は見当たらないにも関わらず、である。

擬人法は、本来、科学的事実や実験データの学術的な説明には用いられない。当然、話し手と聞き手のジェンダー、地域、民族、宗教などの背景に左右される伝達リスクも高い。しかし、短時間の講義や講演で、新たな法則や現象の「生き生きとした」面を伝えたい—そう考えれば、擬人法は科学コミュニケーションにおける独特な修辞法の一つといえるだろう。日本生物物理学会が企画・監修した文部科学省ポスター「一家に1枚動く！タンパク質」[1]では、タンパク質分子の可愛いキャラクターたちが細胞内で所狭しとはたらき様が描かれている。

一方、擬人化のアニメやゲームが最近ブームになるのを見聞きする。動物のみならず、微生物、細胞、日本刀、戦艦、国、惑星など、それらの創意工夫には脱帽せざるを得ない。アニメやゲームといったエンターテインメントは、極端な擬人化を含むフィクションであり、対象の「生き生きとした」面を伝える高度技術の集大成である。これらに明に暗に影響を受けて自らの進路を考えた学生や若い世代も少なくないのではないか。そして、「生命らしき」を考え続けている私には、対象の「生き生きとした」面を伝える擬人化は、「人間とは何か」というテーマに通じる寓喩にも感じられ興味深い。

最後になるが、この7月に、国内有数のアニメ会社のスタジオで、凄惨な放火事件が起きた。創作活動に携わる世界中の人々が、この悲愴と喪失を共有し、亡くなられた方々や被害に遭われた方々、ご遺族と会社関係者の心に寄り添っていると聞く。私も、この困難を乗り越えたクリエイターの方々が再び世界を席卷してくれることを期待し、祈ってやまない一人である。

[1]文部科学省website : <https://stw.mext.go.jp/common/pdf/series/protein/protein.pdf>

科学技術インタープリター養成プログラム
science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp

専門知と地域をつなぐ架け橋に

FSレポート!

第2回

理学部3年 廣木颯太郎
人文社会系研究科修士課程1年 平岩 渉
公共政策学教育部専門職学位課程2年 三川慎之介

第1回現地活動を終えて

私達が担当している福井県南越前町では、近年町民が減り続け、町の活気が失われつつあります。この町で今「流動創生」という事業が進行中です。人口減少社会の中、従来のように生活の場を都市部だけに固定せず、地方にも拠点を持つことで、町に関わる人の量(関係人口)を増やして地域全体を活性化させたい! そんな理念のもとに2015年から本事業はスタートしました。具体的には、空き家を活用したリモートワーク環境の提供のみならず、地方に興味のある人が南越前町を舞台に地域の暮らしを体験したり、同様の取り組みがある自治体を訪れたり、都市部でもシンポジウムを開催する等、多拠点生活について考えを深められるようなイベントが定期的に行われています。FSとして取り組む課題は、今年で5年目になる本事業の現状評価と将来性を考えること。



汗をかきながらの農作業

ること。町の発展に本当に寄与するのか、採算はとれるのか、行政か民間どちらが主導すべきか等々多くの難題に挑むためにも、8月の1回目の現地活動では、まずは流動創生を存分に体験することから始めました。一日の始まりは農作業から。地元の農家さんのハウスや畑で、蕎麦の種まきや野菜の収穫を体験しました。とある日は、地域の盆踊り大会のスタッフとしても活動することに。古くからその地に残る歴史を生歌で語る独特な踊りにも挑戦。この踊り、なんと30分間も踊り続けなくてはいけないんです。このような普段とは全く違った日々を送る中で、私達は多くの刺激を受けました。都市部の人が地方での生活から知見を得る……これは、流動創生が目指す目標の1つなのかもしれ



地物野菜で作った料理を囲んで

れません。では、受け入れ側にはどんなメリットがあるのでしょうか。9月に予定している次の現地活動

では、事業を運営する方や行政の方等、主に受け入れ側に焦点を当ててインタビューを行ない、流動創生が果たすべき役割だけでなく、今後の地方と都市部がどう関わっていくべきなのか、真剣に考えていきたいと思います。

フィールドスタディ型政策協働プログラム
www.u-tokyo.ac.jp/ja/students/special-activities/h002.html

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features,Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル (一部省略している場合があります)
8月15日～ 8月29日	広報戦略本部、生産技術研究所、物性研究所	今の世界をもうひとつの世界につくりかえることができる建築の深淵と醍醐味。 百種余りの元素から構成される1億を超える物質。そこに隠された普遍性を探る。 単原子層を積み重ねて、未知の量子輸送現象に挑む。/ UTOKYO VOICES
8月19日～ 9月9日	広報戦略本部、新領域創成科学研究科、社会科学研究所、農学生命科学研究科・農学部、大気海洋研究所	高齢化に対応した社会デザインを考える 「危険」を「機会」に転じる知恵 ITの力を利用した21世紀型の持続可能な農業 ピンチをチャンスに変える福島の農業再生 日本独自の技術でCO ₂ を沖合の海底下に貯留 2つのアプローチで将来の気候を予測する 広大な海の世界を「海水」から探る/ FSIプロジェクトシリーズ
8月19日	本部博物館事業課	総合研究博物館で「研究のモノ語り」にふれるハンズオン・ギャラリー」が開催される
8月19日	附属図書館	文学部所蔵「小倉文庫」のデジタル公開について
8月20日	本部社会連携推進課	高校生のための東京大学オープンキャンパス2019開催
8月23日	理学系研究科・理学部	強い日差しに対応して葉がその厚さを変える仕組みを解明
8月23日	本部博物館事業課	IMT 学生ボランティア募集
8月27日	本部国際戦略課	大連で開催されたサマーダボスにて本学研究者が発表を行いました
8月29日	本部奨学厚生課	令和元年8月の前線に伴う大雨による災害で被災した世帯の学生の皆さんへ
9月4日	本部社会連携推進課	「高校生のための東京大学オープンキャンパス2020」の実施日程
9月4日	大学総合教育研究センター	「大学で教える」を学ぼう。東大FFP大学教育開発論 第14期受講者募集!
9月6日	薬学系研究科・薬学部	前立腺がんの迅速蛍光可視化プローブの開発
9月9日	新領域創成科学研究科、工学系研究科	ヨット部がユニバーシアードで入賞!

CLOSE UP UTOKYO VOICESのセカンドシーズンが終了(広報戦略本部)

2018年1月から始まったUTOKYO VOICESは、各部署から推薦された先生方のとなりをプロの取材陣が伝える、広報戦略本部のウェブ連載です。8月末時点で1期目～2期目の先生計75人の紹介ページを公開済みで、現在3期の取材が始まっています。右は1508号でチラ見せした15人を除く60人のラインナップ。お顔を見て「ヤベー見逃した!」という人は↓こちらからアクセスしてご覧ください。



CLOSE UP 広報誌「淡青」39号を発行しました(広報室)

広報室が丹精をこめて年に2回発行している広報誌「淡青」の最新号ができあがりました。今号の特集は、若き研究者&起業家を紹介する「UTokyo Thirties ~淡青色の三十代たち」です。142年もの歴史を持つ大学であり、どちらかというと老成した印象を持たれがちのようですが、東大にはもちろんフレッシュな若手がたくさんいます。本特集では、キャンパスで日々研究・教育活動に励む教員と、こ

の世になかった事業に取り組むベンチャー起業家の中から、人生の旬を迎えつつある16人のストーリーを紹介しています。知性と情熱の間を往還しながら知識集約型社会を疾走するUTokyo Thirtiesの姿を御覧じろ! 36回目となる連載「キャンパス散歩」では、70周年を迎えた教養学部を擁する駒場Iキャンパスを折茂克哉先生が紹介してくれました。

→表紙は宇宙線研究所前の大気蛍光望遠鏡模型



CLOSE UP

研究のモノ語りにふれるハンズオン・ギャラリーを開催 (本部博物館事業課)



猛暑のなか、オープンキャンパス参加学生のほか、多くの方が来館されました

8月7日～8日、総合研究博物館本郷本館において『研究のモノ語りにふれるハンズオン・ギャラリー』を開催しました。普段触れることのできない展示物に触れることで探究心を刺激し、理解力を深め、実用的知識を蓄積し、楽しむことで学習内容の定着度を上げるといった教育的な付加価値をつけることを目的に、本館マクロ先端研究発信グループの共同活動として2010年から実施し、今回で通算10回目となります。一般向けのイベントですが、『高校生のための東京大学オープンキャンパス』の実施企画としても位置づけられ、今年で3回目となります。

今回は本館の企画講演室において、各分野の研究者による解説のほか学術標本を間近で見たり手に取って触れてもらう「トーク&ギャラリー」を行いました。そして「AMSラボ公開」では、本館の展示スペースに設置されている小型の加速器質量分析装置（放射性同位体炭素14を測る装置）を見せながら解説しました。また、今回より浅野地区にある「タンデム加速器研究棟」の見学ツアーも行い、5階建てビルを貫くように設置された縦型のタンデム加速器を見せながら、高精度の加速器質量分析（AMS）や応用研究について解説しました。

CLOSE UP

ヨット部卒業生がユニバーシアードで8位入賞 (新領域創成科学研究科、工学系研究科)



後列左から2番目・西坂惇之（農学部卒）、3番目・浅川雄基（工学系研究科修士1年）。前列中央・水石さおり（新領域創成科学研究科修士1年）、右端・田原建人（工学系研究科修士1年）

ユニバーシアードは学生のためのオリンピックとも呼ばれる大学生対象の総合競技大会で、夏季冬季それぞれ2年に1回行われます。今年は7月3日～14日にイタリアのナポリで開催され、18競技が行われました。セーリング競技は〈RS21〉という新規格の艇を用いて16チームが参加し、5日間に渡って争われました。運動会ヨット部卒業生を中心とした日本チームは32レースの予選シリーズを経て決勝に進み、決勝4レースによって8位で大会を終えました。

大会の代表選考は今年3月の〈U24&大学対抗マッチレース〉で行われ、運動会ヨット部4

年生（当時）のチームが有資格者中1位となり、代表に選ばれました。大会の男女比の規定により神戸大学の選手1名を加えた5名でチームを組み、海外遠征と国内合宿を含めたキャンペーンを4か月間行って大会に挑みました。他国チームのほとんどが競技歴10年程度の選手で構成されるなか、日本チームは全員が大学で競技を始めた経験の浅いチームでしたが、事前遠征による艇への慣れとコーチの指導の下でチーム練習を重ねたことによるスピードやクルー同士のコンビネーションの向上、また大会期間中の欠点の修正によって決勝進出を果たしました。

CLOSE UP

サマーダボスで東大の研究をプレゼンテーション (国際戦略課)



UTokyo IdeasLabセッションの様子 © World Economic Forum / Sikarin Fon Thanachaiary

7月1日～3日、中国・大連で世界経済フォーラム（World Economic Forum: WEF）によるAnnual Meeting of the New Champions（サマーダボス）が開催され、本学を代表して、宮園浩平理事および柴崎亮介空間情報科学研究センター教授、三宅弘恵情報学環准教授、新井亜弓空間情報科学研究センター特任研究員の4名が出席しました。サマーダボスは、アジアを中心とした世界の経済界、政界、学術界のリーダー達が集結し、さまざまなグローバルな課題の解決に向けて集中的に議論を行うWEF主催の

国際会議です。毎年1月にスイス・ダボスにて開催されるWEF年次総会（ダボス会議）に次ぐ規模で、毎年2,000人を超える参加者が参加しています。7月3日には、Big Data Visualization: A New Era in MappingというテーマでUTokyo IdeasLabセッションを開催しました。宮園理事が大学の紹介と挨拶を述べた後、柴崎教授、三宅准教授、新井特任研究員の3名がプレゼンテーションを行いました。会場には、学術界のみならず産業界などさまざまな分野から聴衆が集まり、発表に熱心に耳を傾けました。

表紙について

今号の表紙は、人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設で毎年夏に行われている野外考古学実習の1コマです。本部広報課の取材陣が訪れた8月30日、竪穴住居跡が黙々と地面に向かっていた学生さんが掘り当てたのは、どんぶり鉢ほどの大きさの土器。最初は土と見分けが付きませんでした。常呂で20年以上研究を続ける熊木俊朗教授の

アドバイスを受けながら注意深く泥を払っていくと、次第に鉢の丸みや高台まできれいな姿が。大島2遺跡竪穴住居跡5号住居で2つ目となる擦文土器の出土でした。過去にも取材が入った日には出土の確率が高かったそう。実習の成果を上げるためにも、職員が北の大地で英気を養わせていただくためにも、毎年行かせてもらえるといいのですが……。※今回の取材の成果はUTokyo FOCUSで公開します。



- ①今回出土した擦文土器。古の暮らしが息づく。
- ②熊木先生と「ところ遺跡の森」の復元住居。
- ③夕闇迫るサロマ湖。
- ④擦文文化を代表する竪穴住居跡（ところ遺跡の森）。



大学にも及ぶフロン規制

2015年に地球温暖化の抑制を目的としたパリ協定が結ばれ、わが国も低炭素社会を目指して対策が進んでいる。2050年目標は温室効果ガスを2013年基準に対して80%削減することになっており、天地がひっくり返るほどの社会変革を求めている。地球温暖化の主たる原因は化石燃料起源の二酸化炭素の排出であるが、温暖化係数（GWP）が二酸化炭素の数千倍あるフッ素化合物のハイドロフルオロカーボン（HFC、代替フロンとも呼ばれる）も規制対象で、エアコンや冷凍空調機器用に広く使用されている。HFC類は成層圏オゾン層を保護することを目的としたウィーン条約モントリオール議定書の中で2016年に生産消費を段階的に削減することが決まり（キガリ改正と呼ばれる）、2036年までに基準年に対して85%の削減が課せられている。削減が容易なのでパリ協定よりかなり早い削減ペースが設定されていると思われるかもしれないが、決してそうではない。GWPの低いガスを開発し、使用中にガスが漏洩しないように適切な管理をし、冷凍空調機器を廃棄するときにはガスを回収して廃棄する

社会システム作りが必要である。

大学に関係することでは、業務用途で使用する冷凍空調機器に使われているHFCガスの廃棄時回収を促すために改正フロン排出抑制法が2020年4月から施行される。改正後は機器を管理する者が回収を依頼しなかったり、回収処理した証拠書類を保管しなかったりすると、管理者（使用者）が罰せられることになり、直罰規定となっている。建物のエアコンはその対象機器になることは言うまでもないが、恒温槽や業務用冷凍冷蔵庫、温度を制御した装置などには冷凍機が入っており大小を問わず対象機器となる。それらを廃棄するときには、冷凍機からガスを回収処理しなければ、産業廃棄物回収業者に引き渡してはならないので、くれぐれもご注意いただきたい。当研究室では小さな恒温水槽を2個廃棄して、ガス回収に3万円くらいかかりました。このような義務が課せられることを承知おきください。

飛原英治
(新領域創成科学研究科)

